

---

# The Bloom Of Flame

万能誠司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Bloom of Flame

### 【Zマーク】

Z5431BA

### 【作者名】

万能誠司

### 【あらすじ】

一〇三八年、アメリカで『アクト・ビハイカル』という最先端技術を集結させた戦闘兵器が開発され、旧来の戦闘兵器時代から最先端兵器の『アクト・ビハイカル』の時代へと移行した。

その時、作られた学園、『国際国立美菜崎高等学校』そこは最先端技術を学ぶ学校。

主人公の風原雅は、そこで多くの仲間を作り、心なしかハーレム工ンド？ を形成する。

いつの間にか、ハーレムになってしまい。ハーレムであるがために

世界の標的となってしまった。

どうする、雅。生き残れるのか、雅。男も女も味方に取るのか、敵に取るのかわからぬ。

ハチャメチャな雅の世界が、ここに誕生つ！！

## プロローグ 漆黒の追跡者（前書き）

<http://jagy.blog91.fc2.com/>  
上の管理人 ; Shana30710 と作者、管理は同一人物です。

## プロローグ 漆黒の追跡者

### プロローグ 漆黒の追跡者

機械を通していたとしても、風の流れを感覚として掴めるのは心地が良い。風が頬を撫でるのも、足がアスファルトの上を走っているのも感覚としてよくわかる。

今、俺、風原雅は、最先端技術の結晶、『アクト・ビハイカル F - 0 型』に搭乗している。

『アクト・ビハイカル』とは、一〇三八年にアメリカで開発された戦闘兵器で、戦場での行動を想定されて作られている。潜水・水泳、山岳地帯の走行、飛行、宇宙空間での浮遊、それらを何なりとこなす事ができる兵器だ。しかし、兵器だが、戦争では一度も使われたことはない。

なぜなら、戦争が起きないから。世界が平和だから。

そう、最後の戦争以来四〇年程は、戦争は起きていない。これらも戦争は起こらないだろう。なら

なぜ、いまこうやって、俺が兵器に搭乗して訓練をしているか。それは、簡単なことだ。これから戦争が起きるかもしれないという緊張を纏つた空気が世界中に充満しているから。そして、この緊張の発端となつたのは、今俺が搭乗している兵器『アクト・ビハイカル F - 0 型』の開発が原因。

アメリカが国家機密で開発を推し進めていたことを、どこぞのハッカーがアメリカ軍事コンピュータにハッキングし、情報を流出した。当然、ハッカーは国際指名手配犯として吊るし上げられたのだが、捕まらずに堂々とした面持ちで警察と話していた。テレビに映つた彼の表情は、それはそれは笑顔で溢れていたよ。捕まるどころか、保護されていたよ。ロシアに。

事情を知ったロシアはアメリカに更なる情報を提供するように求

め、アメリカはそれに応じて『アクト・ビハイカル』の情報詳細をロシアに伝達した。

だが、アメリカの情報提供にも条件があつたらしく、条件の内容が面白いニュースになった。

その条件の内容というのは、アメリカとロシアを挟む太平洋付近の国に特別士官学校を創設することだった。最先端技術、科学を扱う特別士官学校の建設。そこで教育を世界で義務付ける方針で收拾が付いた。そして、場所はここ東京台場が教育の舞台となつたのだ。この時、これに耳を傾けていた日本政府は大喜びしてしましたよ、本当に。

で、俺が今『アクト・ビハイカル F-0型』でレインボーブリッジの上空、国道T-三六九号線を走行中なのだが、後ろから黒い機体に追いかけられているのがバックモニターで確認できる。戦闘訓練待ちの機体だろうか。

真っ黒な機体。俺が乗っている機体と同じように、背に天使の翼のような推進装置で羽ばたきながら、アスファルトを足で蹴つて走行する。黒鉄 ブラック・チェイストか。

ブラック・チェイスト、この機体は機動力に優れ、使用武器が多彩で、アクト・ビハイカルの様々な機種の中で万能と謳われる機体。当然、走行も早い。やはりといったところだろう、もう俺の背後にぴつたりと付いている。しかし、なぜ軍事専用機種が国道なんかで走行練習、戦闘待機をしているんだ。普通であれば、この熱い夏、太平洋沖で水場訓練を行なう筈だ。なのに、なぜここにいる。何かがおかしい。

まあいい、ここはあまり関わらないようにしていれば、なにも起きないだろう。

『そここの黒いの、煽るな。テスト走行中だ、まだ試合は行えない。戦闘志望なら事務で許可を要請し、待機施設で待つといい。現在、こちらはテスト走行中、だから他の機体にあたつてくれ』

『.....』

俺が通信機で対戦を断ると、それを無視して、無言で後ろから突つ込んできた。

( 話の通じねえ奴だな、もう一回言わなきや わからねえのかな。次忠告を無視したら、学長にチクるぞ、おい )

『 そこのブラック・チェイスト、この場からの撤退を願いたい。 ……この命令に従わなくば、こちらは徹底抗戦を仕掛けるが、それでいいか? 』

『 …… プシュー 』

相変わらずの無反応だ。口を開けたかと思えば、機体のファンが熱を放つ音だつた。カーチェイスでエンジンを沸かすような挑発的な行動。徹底抗戦を受けて立とうということだろうか。そうだとしたら、俺は容赦なくかかるが、それはそれでいいだろつ。学則で認められている範囲では、無人地なら、エネルギーが尽まるまで戦つていいことになっているしな。都合もいいことに、ここは国道だが上空、地下に住む一般人を巻き込む心配もない。

『 よし、なら戦わせてもらうぞ、黒いの 』

俺が アサルトライフル AR型荷電粒子機関銃を右手に戦闘の構えを取るが、黒い機体はこちらに構えようどしない。その代わりに意味不明な言葉を放つた。

『 イマスグ …… ヲシュウ …… シ、イマスグ …… タイカラゲシャセ …… オ 』

機械じみた口調、息の途切れを感じさせない、単調な日本語。力ク力クしていて、正確に聞きとることが出来なかつた。風の音が聴覚を邪魔する。

『 なんだ? 風の音が凄いんだ、もう少しあつときりと言つてくれ 黒い機体は続ける。

『 イマスグソウ「コウ」シユウリョウウシ、イマスグキタイカラゲシャセヨ』

『 イミワカラネエナ、なにが降りるだ? 軍が乗り込む場所じやねえつってんだよ。この地域は、学園内だ。戦争を起こすような場所

じゃねえ　おつと、手が滑る』

言葉と同時に、俺は上空に一発威嚇射撃を行なう。

注意 敵機、瞬時標準、ビーム系ライフル パート・コ  
ア射撃 着弾まで0・003秒、エネルギー・シールド瞬時展開開始

脳にその電波信号が伝わった瞬間に、青に光る膜、透明な装甲が自機の周りに展開された。辺りがエネルギー・シールドを通して、青く見える。

黒い機体、ブラック・チエイストの右肩の主砲から放たれた光線はシールドに当たると、光の屈折と同じように軌道を変え、上空を貫いた。

雲にクレーターのような波紋が見える。

凄い威力だ。エネルギー・シールドの展開が一瞬でも遅ければ、俺の機体を貫通していただろう。

しかし、安心しているのも束の間、敵機は続けて第一の射撃をしようと標準を円状の青い膜、エネルギー・シールドの中心に合わせる。被弾すれば、貫通する角度だ。

ビュウンッ！

『危ねえ』

またもビーム光線はエネルギー・シールドの側面で屈折し、上空の雲を貫いた。

走行速度を急激に落とす事によつて回避することができた。間一髪で死ぬところだった。

あの射撃は、垂直射撃と言つて、被射体に垂直に構えを取る射撃。弾道を変えられることがなく、確実にダメージを与えることができる。

結構な操縦のうまさだ。正確に垂直射撃をこなすのは至難の業。それをいとも簡単にやつてのけるのは、世界で数人つてところだろう。

『一体、誰が操縦してやがるんだ』

一度も避けられたことで、射撃での戦闘は不可能と見込んだブラック・チェイストは、ビーム系近距離武器、ビーム爪を各指先から伸ばし、斬りかかる体勢に入つた。両手から長い朱光の爪が生えている。どこかの猿だかわからんが、このままでは危険そうだ。

#### 回避。

機体を右側に倒し、斬撃から逃れる。が、ビーム爪の余熱が伝わり、夏の暑さが倍増する。灼熱というのは、このことを言うのだろうか。やはり、中心温度が三千度で設計されたビーム系統の武器との戦闘は辛い。

それにもしても、敵機の逃げ道の予想もなしに近距離武器を振り回すとは、随分と馬鹿な動きをする。射撃精度は凄いと思ったんだが、斬撃がかなり弱い。

もしかしたら無人機なんじゃないか、と思うが、現実、無人機の実用化は程遠い。

無人機は回り込みに、とても弱く対人戦に向いていない。そのためか、無人機はあまり戦闘は行わず、物資を運んだり、敵地の偵察をしたりするぐらいしか、役割を持たない。だから、ここに無人機があるのは不自然だ。よつて、このブラック・チェイストが無人機である確率は極めて低い。おそらく操縦者は初心者、操縦に慣れていないのだろう。

『もう、戦闘はやめにしないか？ 戰況が読める。俺は、これから第一整備場に向かう。戦闘は次回にお預けだ。今度また会った時に試合してやる』

『プシュー、オーケー』

『そうか、じゃあ、俺について来い』

そう言つて、俺は第一整備場に向かおうと左車線から右車線に移行する。そこでカーブを曲がろうとした時、後ろから射撃を食らつた。

自機の右腕が弾かれ、電波信号としての痛みを感じる。

右腕が焼き付くような激痛に襲われる。

『「ああああああああああああああああああああああ』

『どうした！ 雅、なにがあつた！』

佐藤隼人の声が耳元で大きく騒がれる。

『うあつ！　あ、ああ、だ、大丈夫だ、実際に右腕が飛んだわけじゃない、安心しろ。だが、あのブラック・チエイスト、何か危険な臭いがする。隼人、情報は掴めるか？　今の俺じや、パニックでネットサーフィンなんてやってる余裕なんてないんだ。代わりに、情報収集頼むつ！』

なくて大丈夫か?』

『大丈夫だ、こんな初心者、どうせ下級生だろう。勝手に軍のおもちゃを持ちだして、調子に乗ってるだけ。ただし、それだけだ。上級生がお仕置きしなくちゃいけねえみたいだ』

「そうか、だったら援護は向かわせなくてもいいみたい……だが、

向かうからな『

戦いに集中するために、隼人と通信を切る。そして、走行中の機体の向きを反転させ、ブラック・エイストと対峙するように走行を続ける。前方はバックモニターで確認できるから、玉突き事故はないだろう。

『その黒いの、お前、ふざけるなよ。上級生を舐めるんじやねえぞ？ おこつー。』

『ブシロード』

相変わらずのファンの音。

右腕なしの機体だが、相手は所詮走行初心者、必勝間違いなし。

そう思えるが、どこか危険な臭いがする。なんだ？　この違和感は、俺はコイツに怯えているのか、返事かないことにどこかもどかしさを感じているのか、わからない。だた、俺は何なのかわからないんだ。

軍事専用機がここにあることが、なによりの不自然。

軍事専用機がここにあることだが、なによりの不自然。

だがしかし、そんのは関係ないのが、いつか出会うであろう戦場。これは模擬試験と受け取つて、戦うしかないようだ。

失つた右腕に名残惜しい感情を抱きながら、左手でA R型荷電粒子機関銃の標準をブラック・チェイストに合わせ、銃器内部で弾丸のエネルギー調整を行ない 赤い光と鉛弾を放つ。

青い光と鉛弾、同時に放たれた二つが空中で融合し、ブラック・チェイストへと決められた軌道を音速で進む。

ブラック・チェイストは、着弾寸前で各指から伸ばされたビーム爪で目前の弾丸を弾く。

『つち、性能が違すぎるか、軍事用の方が一段程上つて、思い知らされる』

射撃が通じないなら、斬撃を試すまで

足下、光線短刀 展開。

機体の右足、左足、それら両足の側面から青い糸状の光線ナイフを発生させる。

青い光線ナイフ、その名もスライサー、触れたものを三千度の熱で分断する。

『これなら なにつ！』

ナイフを展開している最中に、もう既にブラック・チェイストは、手前に接近していた。

『なんだ、この瞬間移動はつ！ 化物かつ！ あとでやるゲームの予告か？ やべつ、死亡フラグ！』

なんて、俺はバカのなことを言つて

『うあああああああああああ』

『大丈夫か！』

『もう無理そうだ、両腕が切断された。 戰い用もないぜ。 俺はヘブンに先送りだな……じゃあな……相棒う』

ブラック・チェイストが最後の一撃、終焉の一手を繰りだそうと光る長い爪を立てて斬りかかる。

ガギ　ツンツ　ジギツ！

ガギ

ツンツ

ジギツ！

金属の鈍い音、俺の体ごと分断される音　　機体の悲鳴。

俺は、いま死んでいる。現在進行形で俺の死は進んでいる。命の針金は、いとも簡単に切断される綿糸だった。青空が、目の中に充満する黒色に反映されて、濃さを増す。

ああ、視界が鈍い黒だ。

『何、死んだフリしてるのよつ！　ヘタレ氣取り？　そんなんじや、氣取つたつてモテないわよつ！　このヘタレッ！』

声が聞こえる。甲高い　女の子の声だ。

俺は、死んでいなかつたのか……じゃあ、俺の黒はなんだつた。

『幻視洗脳よ』

幻視洗脳？

『幻視洗脳は、死をも感じさせない死　　DEAD OF DEATH。これは、竊盗のために使う、犯罪手法だわ。あなたは、決して死んではない！　幻に踊らされているだけなの、早く気づいてきやあつ！』

その叫びに俺は目を覚ました。

俺は、今までなにをしていたんだ。

目の前で、第三の機体が戦線に乗り込んでいるにも気づかず、俺はなにをしていたんだ。ましてや、女の子が乗っている機体、それを助けないでどうするへタレ！

『大丈夫か！　雅！』

『なんだ、もう一人、入線したぞ、隼人、どうするんだ。一次被害でも生むつもりか！』

『俺は、なにもしてねえ。お前に救援を頼まれたわけでもない！

誰だ、その赤い機体は』

『知らねえよ、勝手に死にに来たんだろ！』

『ああ！ もう勝手にしろ』

ついに隼人は匙を投げやがった。

……通信まで途絶えちまつた……どうすれば……。

深紅で細身の機体、背も深紅で、やはり深紅の翼、すべてが紅と染まったフェラーリのよう。深紅の機体は、刀剣で防衛を図る。ジジジイジジジジッ。

目前で火花が散る。光と光の交錯、いくつもの光は交わる。

俺の青い光線ナイフ。

ブラック・チェイストの赤く光る爪。

もう一つは、黄色の光線剣。

『誰なんだ』

『ボケツとしてないで、交戦しなさいよつ！』

気づけば、彼女の赤い機体はブラック・チェイストに押されていた。

刀の本数が違う。彼女が一であるのに対して、ブラック・チェイストは十。これでは、リーチの長い彼女の刀剣でも勝ち目がない。俺が加わっても、両足の一本をあわせて三にしかならない。どうすれば

辺りを見回す。

下にはレインボーブリッジ、近くに東京タワーがあり  
ブラック・チェイストが無人機だとしたら

『そこの赤いの、こっちに付いて来い、いい策が思いついた  
『ちょっと待ちな』

俺は、東京タワーへ急いだ。推進出力最大にして、飛行を開始する。

翼を大きく広げ、機体を持ち上げる。

それに続くように、深紅の機体も翼を広げ、こちらも出力最大で

東京タワーへと向う。

『で、なにが策なの？　あまり一般人に近づかないほうがいいわ、二次被害をもたらす気？』

彼女は呆れたような口調で聞いてくる。

『まあ、見てれば、わかるつて』

東京タワーに到着。

こちらも深紅、鎧び付いているが、まだ使われているようだ。電波だけは、発しているようだし、まあ、策実行に使えるだろう。黒い機体、ブラック・チェイストが超音速で近づいてくるが、だんだんと速度を落している。ブーストが言うことを聞かないようだ。遂には、ブラック・チェイストは正常な機能を失い、爪の光を失い、正真正銘漆黒と化した。頭部にあたる部分にも光は見当たらない。そして、人の気配もなかつた。

布団をベランダに干すようにして、それを右足に引っ掛けた。かなりドッシリとした感覚が右足に伝わる。

筋肉痛にならないといいが……。でも、

『やはりか、どうもおかしいと思つたんだ。声を掛けても返事なし。返つてくるのは、放熱ファンの音のみ』

『どうということ？』

『あれは、無人機だつたんだ。そして、電波にやられたって訳だ』  
無人機は、必ず誰かが遠隔操作をしている。

遠隔操作は電波を介して行なう。そのため、周波数を合わせなければいけないし、他の周波数と同じでは機能しなくなるため周波数を特殊な数値にするのだが、電波塔には勝てなかつたようだ。

東京タワーは、テレビ放送用電波の周波数を取り扱う。テレビ局の数は、多いため色々な周波数を使つてているんだ。ほとんどオールマイティにな。

そして、無人機は無線通信、周波数の重なりにかなり弱い。だが

ら、こうやって機能停止に追い込まれるってわけだ。

『そういうことね。あんた、頭いいじゃない』

『そうか？ 嬉しいな』

『褒めてない、讚えてるだけなんだからね』

彼女の機体は、こちらに背を向け、そっぽを向いた。

素直じゃないな、コイツ。そうだ、名前でも聞くか、助けられたいことだし、あとでお礼もしたいしな。

『で、名前はなんていうんだ？』

『私がラナ・エリス、この学園の委員長よ。この名前も知らないなんて、あなた本当にこの学園の学生？ 信じられない。で、あなたの名前は？』

私がラナ・エリスって言われても、俺は転校してきたばかりの身だ。ここで走行するのも初めてで、ここであなたと会うのも初めてです。

まあいい、あとで色々と聞かせてもらおう。

『俺は風原雅だ。今日、ここに転校してきたばかりで、機体以外、なにもわからないんだ。これからよろしく、いろいろとお世話になりました』

りそうだ』

『ふふん、私の出番のようね。後輩ができる嬉しいわ』

彼女の機体は、腰に手を当て、背を反らして、胸を張り、高らかに笑う。

……なにがそんなに嬉しいんだ？

『紹介は、終わったわね。これから雅はなにかする予定もあるの？』

『ん、ああ、事務の方に寄つて、俺の所属を確認しに行くんだ。よかつたら、事務に案内してくれると嬉しいんだが、案内してくれるか？』

『もつちろんつー』

## プロローグ 漆黒の追跡者（後書き）

本書を読んで頂き、誠にありがとうございました。  
次作はいつ投稿するか、自分でも把握しておりませんが、最善を尽  
くさせてもらいたいと思います。  
では、また会う時まで、さよなら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5431ba/>

---

The Bloom Of Flame

2012年1月14日22時49分発行